

2 . ヌートリア

(1) ヌートリアの生物学



【学名・分類】

学名：*Myocastor coypus*

分類：齧歯目ヌートリア科

【原産地】

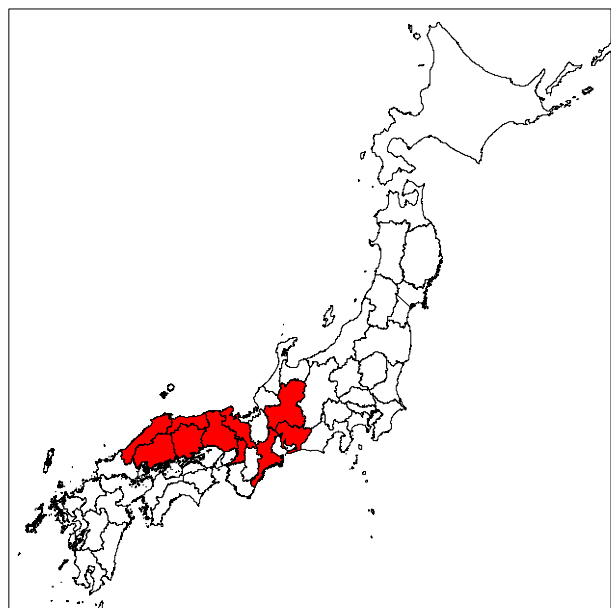
南米のチリ、アルゼンチン、ボリビア、ブラジル南部など。

【導入の経緯】

意図的導入。良質な毛皮を持つため、軍用に供する目的で養殖が始まり、西日本を中心に飼育されていた。太平洋戦争、朝鮮戦争の終結とともに需要が激減し、野外に遺棄された個体が定着した。

【国内の分布】

現在のところ、岐阜県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県、三重県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県など、東海地方より西の本州に定着している。分布が徐々に拡大しており、今後、分布していない地域への侵入が懸念される。



ヌートリアの分布域
(定着が確認されている都道府県)

【形態】

頭胴長約 50～70cm。尾長約 30～40cm。体重 4.5～7 kg。日本に生息するネズミの仲間では最も大きい。茶褐色の毛色で、目と耳は小さい。太くて長い毛がまばらに生えた円筒状の尾を持ち、上下2本ずつの門歯は大きく、前面がオレンジ色をしている。白色の長いヒゲを持つ。爪は鋭く、後足の第2～5指の間に水かきがある。南米原産の齧歯目の特徴として、鼻先から口前縁までの距離が長いので、他のネズミ類と異なって、横から見ると顔が四角く見える。



ヌートリアの頭部（写真左）と全身（写真右）



ヌートリアの前足（写真左）と後足の水かき（写真右）



オレンジ色で鋭いヌートリアの門歯

【繁殖】

繁殖力が強く、年に数回出産し、1回の産仔数は平均5～6頭とされる。妊娠期間は約130日である。通年繁殖するが、春に生産する個体が多い。生後半年ほどで性成熟し、繁殖が可能となる。飼育下では10年ほど生存した記録がある。



捕獲直後に出産した
ヌートリア

1回に8頭を出産している。
およそ半年で繁殖可能となる
ため、急速に個体数を増加
することがある。

【食性】

基本的に草食性で、巣穴の周辺の植物を中心に採食する。ヨシやマコモなどの水生植物の茎や根茎、ヒシの実などを特に好む。農作物では、水稻の苗をよく食べ、ニンジン、サツマイモなども食べる。二枚貝などの動物質の餌も食べることがある。



巣穴のまわりで餌をとるヌートリアと食痕

【生活の特徴】

流れが緩やかな河川や湖沼、ため池等の周辺に生息し、水域から離れて活動することは稀である。泳ぎが巧みで、移動は主に水域を利用する。通常は水面をゆっくりと泳ぐが、危険を察知した際には潜水をする。土盛りの堤防や畔に横穴状のトンネルを掘り、巣穴として利用する。巣穴の出入口は複数作られる。活動時間は夕方および明け方が中心だが、深夜や日中に活動することもある。河川に生息する個体の場合、巣穴を中心とした流域 1 km ほどの行動圏を持つ。寒さには比較的弱く、冬場の活動は鈍る。



堤防に開けられたヌートリアの巣穴



巣穴の周囲は、ヌートリアが採食することで、植物が無くなる。



巣穴とけもの道
水面付近以外に巣穴の出入口がある場合もある。

(2) 識別のポイント

【けもの道】

ヌートリアの巣穴周辺には、複数のけもの道が観察される。

【糞】

糞は濃緑～黒色で、長さは3 cm ほどである。形はソーセージに似て、けもの道の周辺でよく見られる。



ヌートリアの糞



ヌートリアの
けもの道

【足跡】

アスファルトなどの上を移動した際には、足跡と長い尾を引きずった跡が確認できる。水田などの湿った土の上では足跡が観察される。足跡は大きく、前足で長さ6 cm、幅6 cm 程度、後ろ足で長さ12cm、幅7 cm 程度に達する。前足は親指が短いため通常4本の指と爪の跡が残る。後ろ足は5本の指と爪に加え、指の間にある水かきの跡が残ることもある。歩幅は20cm 程度である。



ヌートリアの足跡(後足)



ヌートリアの歩行跡
尾を引きずった跡が残る

【巣穴】

直径 20～30cm、奥行き数 m の横穴を水辺の土手などに掘り、巣穴としている。複数の穴が密に並んでいることが多い。

【似ている動物】

ヌートリアによく似た動物に、北米原産のマスクラット (*Ondatra zibethicus*) がいる。本種の分布は、東京都、千葉県、埼玉県の江戸川周辺に限られており、現在のところヌートリアの分布と重複していない。ヌートリアよりも小型(頭胴長 20～30cm、尾長 15～25cm、体重 0.3～1.0kg)で、尾は縦に扁平し、爪は白くて鋭い。足には水かきはなく、毛が密生するのみである。流れの緩やかな河川や湖沼、湿地に生息する。マスクラットも特定外来生物に指定されている。マスクラットによる農業被害は現在のところ確認されていないが、食性はヌートリアに類似しており、被害を及ぼすおそれがある。



マスクラット



ヌートリア (左) とマスクラット (右)

ヌートリアとマスクラットの主な識別点

	ヌートリア	マスクラット
体の大きさ	大きい 頭胴長 50～70cm 体重 4.5～7kg	小さい 頭胴長 20～30cm 体重 0.3～1.0kg
爪	黒い	白い
尾	円筒状	扁平しオール状
後足	水かきがある	水かきはない

(3) 被害の実態

【被害概況】

ヌートリアによる農作物被害は年々増加しており、平成 20 年度には全国での被害金額が 1 億 2 千万円を超えた。特に近畿地方での被害金額が高く、兵庫県では平成 20 年度に約 5 千万円に達した。家庭菜園等での被害は報告されていない事も多く、潜在的な被害はより多いと考えられる。

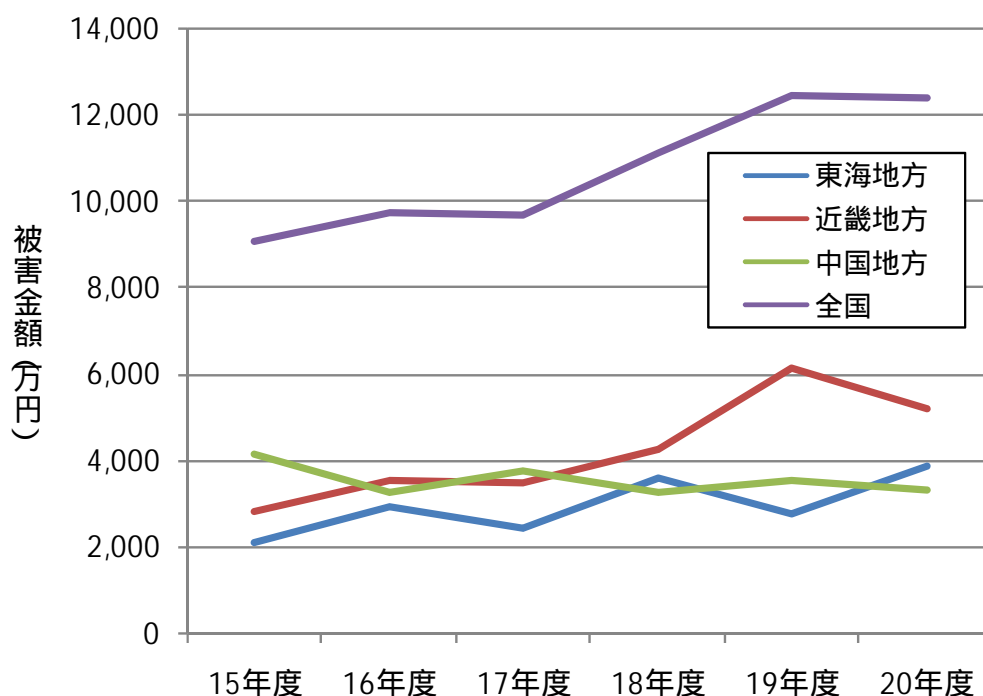


図 4-2 ヌートリアによる農作物被害金額の推移

(農林水産省生産局農業生産支援課資料より)

【被害作物】

水稲の被害が最も多く、次いで野菜(ニンジン、ハクサイ、ブロッコリー、ダイコンなど)、サツマイモ、ダイズ、果実(スイカ、メロンなど)にも被害が見られる。

水稲の場合、田植え直後の苗が柔らかい時期に被害が多発する。野菜の場合、被害は一年を通じて発生するが、特に巣穴近くの植物が枯れる冬期に被害が多くなる。ヌートリアが活発に活動する時間帯(夕方や明け方)に被害が発生する事が多い。



ヌートリアによる水稲の食害



ヌートリアによるスイカ（左）とダイコン（右）の食害

【その他の被害】

ヌートリアは水辺の植物を中心に採食するため、絶滅危惧種の水生植物が食害によって減少した例が報告されている。また、イギリスではヌートリアの掘った穴が原因で堤防が決壊した例が報告されている。日本でも、兵庫県のため池において堤防が崩れた例が報告されている。狭い範囲に多くの巣穴を掘るため、田の畔や堤防の強度が低下するなどの被害が懸念される。

(4) 被害を防ぐ環境管理

ヌートリアは水辺からあまり離れたがらない性質を持つ。そのため、水辺から農地までの経路を、ヌートリアが移動しにくい状態に管理することが有効な対策となる。被害を防ぐための環境管理として、以下の2点が特に重要である。

田畑まわりの草の刈り払いなどにより見通しを良くする
巣穴周辺の草の刈り払い、焼き払い



巣穴周辺を焼き払った例



水田周辺を刈り払った例

こうした対策は移動経路を断つとともにヌートリアの餌場を減少させる効果もある

(5) 侵入防止対策

ネットや金網、プラスチック製波板、トタン板などを用いた侵入防止柵の設置が一般的である。ネットだけの場合、ヌートリアの鋭利な門歯によって破られる事もあるため、プラスチック製波板と組み合わせて設置することが望ましい。柵の地上高は少なくとも 40cm 以上とする。柵の下の地面を掘って侵入することもあるので、地中にも 20cm 程度埋め込むと良い。

金網などによる侵入防止柵に電気柵を組み合わせることにより、侵入防止効果がより高くなる。



ネットと波板を併用した対策例



ネットと金属製メッシュ柵と波板を組み合わせた対策例

(6) 捕獲の方法

【はこわな】

ヌートリアの捕獲においては、はこわなによる捕獲が中心となっている。踏み板式、フック式のいずれのはこわなでも捕獲は可能である。わなの入り口は、ヌートリアのけもの道の直近に来るよう設置すると良い。けもの道以外でも、水際や巣穴の前など、ヌートリアが頻繁に使う移動経路に設置することが望ましい。餌は、ニンジンがよく用いられるが、カボチャ、スイカ、サツマイモでも良い。わなの中だけでなく、わなの入り口付近やけもの道にも撒き餌として餌を置いておくと効果的である。ただし、わなの扉の開閉に支障がないよう注意する。

池などでは、水上に木材などで作った人工の筏を設置し、その上にはこわなを置く方法もある。この方法は、錯誤捕獲のおそれはあまりないが、わなの管理に手間がかかることもある。



はこわなの周囲に撒き餌を置く



ヌートリアの利用頻度が高い場所に設置する



撒き餌に寄せられ、はこわなに近づいてきたヌートリア



岐阜市提供

フック式のはこわなで
捕獲されたヌートリア



北栄町提供

踏み板式のはこわなで
捕獲されたヌートリア

【その他のわな】

一部の地域では、とらばさみが使用されている。現在とらばさみは禁止猟具に指定され、狩猟での使用は禁止されている。とらばさみの使用にあたっては、有害鳥獣の捕獲等を目的に捕獲許可を得る必要がある。



とらばさみで捕獲されたヌートリア